Ⅱ　第7回鯨に関する座談会

主催　水産海洋研究会

主　題　「鯨の資源と環境」

日　時　昭和41年12月7日午后1時～4時

場　所　日本水産株式会社大会議室

コンビーナー　大　隅　清　治　（東海区水産研究所）

話題および話題提供者

日本における捕鯨業の変遷　大友　亮（日本近海捕鯨株式会社）

チリー・ペルー沖の鯨の資源と環境　渡瀬節雄（大洋漁業株式会社）

鯨の漁場と資源　大津留健（日本水産株式会社）

鯨資源診断における海洋条件（プランクトン、海況等）の考慮について　根本敬久（東京大学海洋研究所）

1　日本における捕鯨業の変遷

大友　亮（日本近海捕鯨株式会社）

大正14年一作業員として東洋捕鯨にはいつて以来40年余りたち、主に大洋漁業で働いた間にみた歴史的発展をのべた。古来の突とり、網とりの捕鯨から、明治30年代に日本遠洋漁業株式会社設立以来ノルウエー式捕鯨に発展、諸会社乱立后経営合理化・資源保護などの目的から、明治42年東洋捕鯨、長崎捕鯨、大日本捕鯨その他の会社が合併し、東洋捕鯨株式会社を設立した。大正6年に改組した土佐捕鯨は藤村捕鯨および大東漁業を買収したが、大正13年当時の林兼商店は後に現大洋漁業に吸収された。大正12年ごろは三陸沖では距岸100浬までの漁場で遠洋捕鯨、鮎川捕鯨がマッコウクジラを専門にとつていたが、当時東洋捕鯨（共同漁業と合体前、日水の前身）の大型捕鯨船が130トン級であつた。昭和9年日本水産が始めて南極洋母船式捕鯨をはじめた。土佐捕鯨所属福志満丸（130トン）船長志野徳助らが活躍していた当時の捕鯨砲は70ミリ（前からこめた）が後に90ミリ砲で後こめになり、当時の船速は10－11ノット出たとき鯨がよくとれると喜んだ。今では船速15－16ノット出ても鯨が獲れない場合が多くなつたが、時代とともに鯨の方が速くにげるようになつたのか？大正11－12年までは100浬以上沖へ出る捕鯨船はなかつた。志野徳助は明治40年以来福志満丸船長としてノルウエー式捕鯨に従事し、天測を学び、当時乙2の資格者の多かつた中で甲2の免状をとり、はじめて金華山三陸100浬以上沖で好漁した。そのころは天測不要の近